

考え続ける道徳の授業づくり

～学びを表現し、よりよい生き方をめざす子どもの育成～

吉松 智昭

はじめに

昨年度までは、学び合い活動の場を通してよりよい生き方について考え続ける道徳学習の実践研究に取り組んできた。身体感覚や話し合い活動・書く活動を取り入れ、学び合い活動の場の工夫から、ねらいとした道徳的価値にせまることができた。また、「考える力」の変容を捉える実際の方法を見出し、道徳における「考える力」の伸びを捉えることができた。

本年度は、今までの「考え続ける道徳の授業づくり」で大切にしてきた学び合い活動の場の設定を継承しながら、道徳の時間での「学び」を明らかにしていきたい。さらに、その「学び」を実際の生活場面でも活かし、直に道徳実践力につながるような「学びを創り続ける授業」のあり方を探っていきたい。

1. 「学びを創り続ける」子ども像

(1) 道徳の時間でのめざす子ども像

道徳の授業の目的は道徳的実践力の育成である。教師の一方的な押し付けや単なる行動の仕方や言葉の使い方などに終始せず、どのような場面・状況においても、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができるような「内面的資質」としての、道徳的実践力の育成である。それを目的とする道徳の時間では、道徳的価値を実現するための適切な行為を支えている「こころ」を豊かに育てたい。そのためにも、毎時間、児童が自らの日々の生活をふりかえり、これからの自己の生き方に結び付け、よりよく生きようとする力が重要になる。これこそがまさに道徳学習で求められる「考える力」だと考える。また、よりよく生きようとする力を育成していくためにも、一度考えた内容に満足することなく、友だちとの学び合い活動から、さらによりよい生き方・考え方はないかと考え続け、その道徳的価値を実践していく姿が道徳での目指す子ども像だと考える。

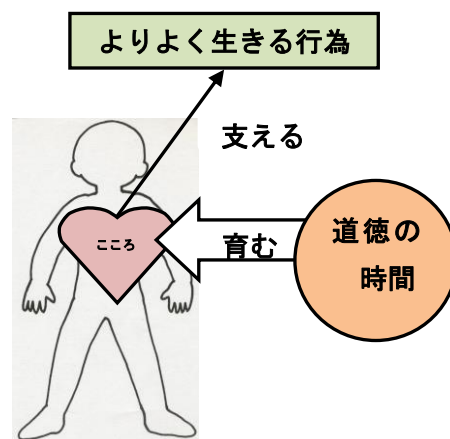


図 11-1 目指す子ども像

(2) 道徳の時間での「学びを創り続ける」とは

上記の「考える力」は、日々の生活の中でも、道徳の授業の中でも共通している。ある状況下や場面で、「考える力」を発揮し、その道徳の時間のねらいとなる道徳的価値についてのよさを感じ取り、その場面で人としてふさわしい行為や行動を選択・実践することを「学びを創る」と考える。そして、その結果から得られる充実感、満足感を感じ取り、これからの自己の生き方に結びつけて考えることが、さらに次への「学びを創る」につながっていく。よって、この一連のサイクルが道徳の時間における「学びを創り続ける」ことになると考える。

2. 学びを創り続ける授業の視点

(1) 学び合い活動の場の設定

資料などを通して、よりよく生きようとする考えをもつだけでなく、昨年度まで研究してきた学び合い活動の場を通して、さらによりよい生き方を考え続ける道徳の授業を展開していく。この「さらによりよい生き方を考える力」を育むことは、普段の生活の中での道徳的実践力を高めることにつながる。よって、この学び合い活動の場を有効的なものにする事で「学びを創り続ける」この一連のサイクルが推し進められると考える。これを実現するためにも、道徳の授業では、次の3つのことを大切にしている。

①からだで考える

道徳は、自らを見つめ、自らに問いかけることから出発する。自らがよりよくあろうと考えるには、それまでの自分の体験・経験を想起する必要がある。しかし、振り返るといっても、ある状況下を想定し、そこでの道徳的価値を考え、それにふさわしい行為を考えるだけでは、主人公に同化していることにはならない。内面的な部分も考えていくためにも、身体感覚から自分をふりかえるアプローチを実施していく。実際には、役割演技や動作化を多く取り入れて授業を展開していく。役割演技や動作化のように、具体的な言葉や動作のある人物になりきって演技をしたり動作をしたりすることで、心情を高め、自分の経験や体験に同調させ、考えを素直に表現しやすくなる。以前の研究から、身体感覚は、ある道徳的価値の理解とその行為のあいだ（間）をつなぐ役割を果たしていることが明らかになってきた。ある道徳的価値を知っていることと行動していることとのあいだ（間）をからだで感じ、考えることで今まで実践してきた道徳的価値の気づきや自覚を確認することができる。

②友だちと考える

児童が体験的活動から感じたことや考えたことは一人ひとり違う。今までの経験や養ってきた身体感覚が人それぞれ違うので当然である。その一人ひとりの感じ方や考え方を尊重した授業は大切である。しかし、その自分の考えだけで終わるのではなく、友だちの考えも取り入れて、新しい考えや気づきを生み出すことで、さらによりよい自分を目指そうとすることができる。その友だちの考えを交流する場として話し合い活動が行われる。話し合い活動は、児童相互の考えを深める中心的な学習活動であり、道徳の時間においても重要な役割を果たす。考えを出し合う、まとめる、比較するなどの目的や学年、学級の実態に応じて効果的に話し合いが行われるように工夫する。

③振り返り、さらに考える

道徳の授業でよりよく生きようとするには、身体感覚から自分に振り返る場や友だちと意見を交流して、自ら考えを整理して、深める機会が必要である。友だちからの考えを聞き、自分の考えと比べ、なぜ友だちはそう考えたかを受け止めさせる。そして、自分はどうなのか深く考えることによって、学び合い活動の場が成立していると考えられる。この自分の考えを深める、自分のところを見つめなおす機会を書く活動を通してつくっていく。

(2) 子どもが学びを推進する場面

人は、ときには自分の限界や特性を自分自身で決めつけ、その枠組みの中で生きていこうとする。しかし、人はそれでも、「もっと、こうありたい。」「本当はもっとよくありたい。」という願いを心にもち続けている。その「よりよく生きたい」という願いが学びの推進力になると考える。以下の3つの場面

を「子どもが学びを推進する場面」と考え、学び合い活動の場に取り入れ、学びを創り続ける推進力として活用していきたい。

①今までの自己に振り返る場面

資料から登場人物の心情を考えるにしても、児童は自分の経験、体験を振り返り、自分に置き換えて考える。そこを動作化や役割演技による身体感覚から自然と想起することで自己と照らし合わせたり、友だちとの話し合いのときに共有できる感覚をもったりできる。また、自己の欲求や弱さに負け、ふさわしくない行為、行動をとってしまう場面では、「自分だけではない。」「そういう感情が湧き立つことは当たり前なんだ。」という自己認識ができる。このような自己認識をすることで、自己の課題が明確になると同時に、「よりよくありたい。」という願いが学びを推し進めると考える。

②学びを創る楽しさに気づく場面

自分の考えだけでなく、他者の多様な考えに出合うことによる発見や整理し深める自己意識の再構成によって、新たな自分への出会いを気づかせたい。道徳の時間に、何について学び合い、何について学んだかをはっきりすることで、その過程や思考を楽しく感じ、さらに考えていこうとする意欲につながると考える。

③成長を実感し、これからの自己の生き方に結びつける場面

道徳の時間に学んだ道徳的価値のよさを役割演技や書く活動で確認する。そのとき得られた充実感や満足感を実感し、自己の生活を振り返り、具体的にどのようなことをすればよいのか、どのような気持ちを大切にすればよいのかを今の自分と照らし合わせて考え、価値や課題を明確にすることで道徳的实践力へとつながると考える。

3. 学びを創り続ける授業の構成

(1) 学びを表現する場の設定

学びを表現することで、学び合い活動の場から再構成された自分の道徳的価値に対する考えを明らかにし、これからの自己の生き方や在り方につなげていく。

①書く活動から学びを表現する

中心発問で、書く活動を行うことにより、話し合いを経て自分の考え方を改めて再構築する時間を設定できる。また、色を変えて記入することで、自分の思考の変容を把握することができる。さらに、多様な考えに出会い、資料の状況下での、自分のよりよい考え方を表現することで、その道徳的価値を自覚し、道徳的实践力を高める。

また、本時の最後に学習を振り返る欄を作ることで、自分の生活に実際にふりかえって考えさせる。現時点での自分の状況や立場、感情などを踏まえて、これからの生活で大切にしていきたいことを自分の中でまとめることで、具体的な生活場面での学びを創る姿を想像し、道徳的实践力を高める。

②役割演技から学びを表現する

資料の結末部分で、今までの学びから「よりよい生き方」を役割演技による実践をすることで、その行為を支えているものを言語化させたり、その行為の結果、得られた満足感や充実感を感じとらせたりすることにより、これからの自己の生き方に結びつけやすくする。

③終末から学びを表現する

生活の中から道徳の時間でねらいとする道徳的価値に触れる導入を工夫し、終末でそこを振り返る

ことで、実際の自分の生活と結びつけやすくなる。学んだ道徳的価値を実践していく具体的な行為を考えるだけでなく、今の自分を把握し、これからの生活の中で、どんなことを大切に、生きていきたいかを振り返る場にしていきたい。よりよい考え方・生き方についての価値や課題を考え続けることができているならば、今後の学びを創り続けるための道徳的実践力につながっていくと考える。

(2) 経験や体験、身体感覚からの想起

昨年度同様に役割演技や動作化を多く取り入れて実践していく。役割演技や動作化のように、具体的な言葉や動作のある人物になりきって演技をしたり動作をしたりすることで、心情を高め、自分の考えを素直に表現しやすくなる。また、その役割を交代したりして演技することによって、同時に他人の立場を理解することができるようになる。さらに、相手の演者を教師が演じて、その時間の道徳的価値につながる心情・態度・判断に迫る意図的発問をすることで、自己の道徳的価値に対する価値観を明確化することができる。道徳の授業は、道徳的価値の自覚を深めることを通して、道徳的実践力を育てなければならない。役割演技は、創造的な道徳的態度を形成し、より自発的な道徳的実践力へとつながっていく。このことは、昨年度までの研究で明らかになっている。その他にも、子どもの興味・関心に応ずることができ、学習意欲を喚起することで、学びを推進する場としても期待される。

そして、動作化は、ある道徳的価値の理解とその行為のあいだ（間）をつなぐ役割として十分果たす。もちろん役割演技でも十分に果たしていると考えられるが、特定の一人が前に出て、教師が意図的発問をする役割演技では、その身体感覚でのりしろにあたる部分が、全体で共有しきれているかという課題がある。簡単にその場で全員ができる動作化は、その点では効果的だと考えられる。

(3) 道徳の授業の想起を促す場の設定

前にも述べたが、実生活の中で「考える力」を発揮し、道徳的実践力に結びつき、そこで得られた充実感や達成感が次の学びを創っていくことにつながると考える。よって、実生活の中で自然と道徳の授業を思い出し、そこでの学びを生活の中で活かしていくような工夫に取り組みたい。

例えば、道徳の授業で教材として使った掲示物をそのまま残しておいたり、別のところに掲示したりすることで、それが目に入りその授業でねらいとした道徳的価値について思い出すことや、インパクトの強い資料を扱い、その人物像を思い浮かべることでその授業でねらいとした道徳的価値について思い出すと考える。日々の生活の中で出てきた道徳的な場面での実践に活かされているか検証していきたい。



図 11-2 「ぞうさんとおともだち」で扱った掲示物



図 11-3 「かぼちゃのつる」で扱った掲示物や教材

【引用・参考文献】 『小学校学習指導要領解説 道徳編』 文部科学省（東洋館出版社）